



インタビュ
書いたのは
私です

手嶋龍一

Teshima Ryūichi

てしま・りゅういち／49年北海
道生まれ。外交ジャーナリスト・
作家。01年NHKのワシントン
支局長として9・11事件を11日
間不眠不休で中継放送した。06
年に小説『ウルトラ・ダラー』を
上梓。他の著書に『外交敗戦』『葡
萄酒か、さもなければ銃弾を』など

「命のビザ」杉原千畝の 「もうひとつの顔」と、密かな 国際情報ネットワーク—— 驚愕のインターネットワーカー小説

——前作『ウルトラ・ダラー』にひきつづき、今回も英情報部員のステイブンと、その盟友、アメリカの金融Gメン、マイケルのコンビが大活躍します。現実のインターネットジェンスに基づくものと思えない秘話満載されていますね。

これはという素材を新作ですべて使い尽くしてしまふので、インソップ童話の「キリギリス型の作家」といわれています（笑）。

ご指摘のように、この本で使われている材料はすべ

て現実世界で生起しているものばかりです。新古典派のノーベル賞経済学者、ミルトン・フリードマン博士が、論文執筆の見返りに5000ドルを要求したという話も実話ですよ。「彼の論文なら5万ドルのはず」という指摘がありました（笑）。

なかでも驚くべきは、第二次大戦中の欧州で、ユダヤ人難民に出国ビザを発給した外交官・杉原千畝をめぐるストーリーです。

そう、リトアニアに赴任した領事代理、杉原千畝の

二つの顔が戦後世界を変えたと言っている。杉原の「命のビザ」によって生き延びた人々は欧米で「スギハラ・サバイバル」と呼ばれています。そんなユダヤ難民たちが、ナチスの手を逃れ、約東の地・アメリカのシカゴ市場で数々の金融新商品を生みだし、今日の隆盛を築きました。杉原こそ、尖锐な資本主義システムを誕生させる一粒の種を播いた人でした。

私はNHKワシントン特派員だった1987年、「ブラック・マンデー」の大暴落に遭遇しました。ニューヨークの株式市場は心肺機能停止状態に陥りました。金融先物を扱うシカゴ・マーカンタイル取引所は肅々と商いを続けていた。

先物市場のほうに暴落による衝撃は大きいはずなのですが、どのエコノミストも、なぜマーカンタイル取引所が市場を閉じなかったのか答えられませんでした。

その疑問がようやく解けたのは、ワシントン支局長として、国防長官だったラムズフェルドさんをシカゴに訪ねたときでした。彼はマーカンタイル取引所の大立て者を紹介してくれました。その人物に「なぜあのとき、市場を閉じなかったのか？」と質すと、「自分が『スギハラ・サバイバル』だったからだ」と意外な答えが返ってきた。

自由な市場での取引こそアメリカを自由の国たらしめている。ナチスとスターリニズムという二つの全体

主義の狭間から逃れたユダヤ難民にとって、自由な取引の尊さは、命を超えるほど重要なものだったので。だからこそ、暴落に怯えて市場を閉じることなど考えなかったのでしょうか。私のアメリカ取材でもっとも印象的な言葉でした。

——そしてもう一つ、外交官・杉原の意外な素顔も明かされています。なぜ杉原がユダヤ難民に6000ものビザを発給したのか、その本当の理由も。

杉原さんが偉大なヒューマニストだったことは事実です。しかし、「命のビザ」の発給をめぐるドラマはそれでは終わらない。彼は日本の優れた情報士官、つまりインターネットジェンス・オフィサーの系譜を継ぐ逸材だ



私のいちばん

Questions & Answers

Q1

いちばん
気になった
ニュースは？

Answer

特捜部、小沢起訴断念

Q2

いまいちばん
会いたい人は？

Answer

ウィンストン・チャーチル卿

Q3

いちばん
よく読む雑誌は？

Answer

ロンドン・エコノミスト誌

Q4

いちばんよく見る
テレビ番組は？

Answer

BBCワールドニュース

Q5

いちばん
行ってみたい
場所は？

Answer

スコットランド・ハイランド地方

Q6

いちばん大切に
している時間は？

Answer

サラブレッドの血統研究

Q7

いちばん
消したい過去は？

Answer

談合組織「記者クラブ」のメンバーだった事

Q8

いちばんの野望は？

Answer

「マカオの帝王」の名をほしいままに――

Q9

いちばん執筆に
集中できる場所と時間？

Answer

北海道・サラブレッド牧場、早朝

Q10

いちばん
気になる作家は？

Answer

カズオ・イシグロ

ったのです。

当時ロンドンのポーランド亡命政府は、全ヨーロッパにインテリジェンス・ネットワークを張り巡らしていました。杉原はその中核を担うユダヤ系の人々と連携して、独ソの動向を探った超一級の機密情報を入手し、日本に打電していた。ビザ発給と情報はバーターで交換されていたのでした。

これらインテリジェンス・オフィサーとしての素顔は、杉原自身がロシア語で綴った供述書やポーランド側の証言などから裏付けられます。もっとも、インテリジェンス世界を取材対象としてきた私は、以前からそんな杉原像に気づいていました。杉原に情報を提供

していたポーランド情報部員が真実を語り始めたため、そろそろ書きどきかなと考えたのです。

杉原のネットワークを受け継いだのはストックホルム駐在の武官だった小野寺信少将でした。私は夫人の百合子さんから、参謀本部にあてて打電した機密の公電の話を聞いたことがありません。百合子夫人は常に帯



『スギハラ・ダラー』

新潮社 / 1680円

のでしょうか。

日本の破滅を意味する情報をなかつたものとして捨て去ったのかも知れません。国家の指導者は、関心の所在を情報部門に伝え、情報担当者は一般情報からこれはというものを選び抜き、その意味を読み解いて、インテリジェンスに高めて指導部に報告する。そうして「インテリジェンス・サイクル」を常に回しておかなければなりません。これは洋の東西を問わない原則ですが、いまの鳩山政権にそんな機能が備わっているか、はなはだ疑問です。

日本はいま、アメリカと中国というG2体制の狭間で揺れ動いています。見方を変えれば、いまこそインテリジェンス能力を駆使して国家の命運を決めるときでしょう。

この作品を通じて、日本の読者のなかに眠っているインテリジェンスの資質を呼びさましていただければ、著者としてこれにすぐる喜びはありません。

インテリジェンスの教科書を読むくらいなら、物語の世界にどっぷりと浸って、いつの間にか情報感覚に磨きをかけることをお勧めします。加えて、グルメ小説や古都金沢をめぐる紀行小説としても読んでいただければと思います。ステイプルの道案内で、インテリジェンス・ワールドを存分にお楽しみください。

(構成／伊藤淳子)